

6 3 6 1 - 7 0 1
平成 1 9 年 7 月 2 5 日

各関係機関の長
各病害虫防除員 殿

宮崎県病害虫防除・肥料検査センター所長

平成 1 9 年度病害虫発生予報第 4 号について
平成 1 9 年度病害虫発生予報第 4 号を発表したので送付します。

平成 1 9 年度病害虫発生予報第 4 号

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。
発生予報の概要

作物名	病害虫名	発生量の 平年比	本文の記 載ページ
普通期水稲	葉いもち	並	2
	紋枯病	並	2
	ツマグロヨコバイ	やや少	2
	セジロウンカ	やや多	2
	トビイロウンカ	やや多	2
	コブノメイガ	並	3
野菜類全般	アブラムシ類	並	3
	ハスモンヨトウ等のチョウ目(鱗翅目)害虫	やや多	3
カンキツ	かいよう病 (注意報参照)	多	3
	黒点病	やや少	3
	ミカンハダニ	並	4
	チャノキイロアザミウマ	やや多	4
チャ	炭疽病	やや多	4
	輪斑病	やや多	4
	チャノコカクモンハマキ	並	4
	チャハマキ	並	5
	チャノホソガ	並	5
	カンザワハダニ	並	5
	チャノキイロアザミウマ	やや多	5
	チャノミドリヒメヨコバイ	やや多	5
	クワシロカイガラムシ	やや多	5

作物の生育状況(7月中旬)

普通期水稲は分けつ初期、温州みかんは果実肥大期、茶は三番茶の摘採前であった。

8月の気象予報

気温は平年より低い確率 40%、降水量は平年より多い確率 40%、日照時間は平年より少ない確率 40%と予想されている。

(1か月予報 鹿児島地方気象台 7 / 20 発表)

発生予報の根拠および防除対策

普通期水稲

1 葉いもち（並）

[予報の根拠]

- 1) 7月中旬の葉いもちの発生面積率11.9%（平年20.6%）は平年並、発病株率1.2%（平年6.6%）は平年よりやや少である。
- 2) 向こう1ヶ月の気象は、降水量は平年より多い確率40%、日照時間は平年より少ない確率40%と予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 葉いもちの見られるほ場では早めに防除する。
- 2) 穂いもちについては、出穂前に粒剤を施用するか、粉剤または液剤による穂ばらみ後期と穂揃期の防除を徹底する。

2 紋枯病（並）

[予報の根拠]

- 1) 7月中旬の巡回調査では発生未確認である。
- 2) 向こう1ヶ月の気象は、降水量は平年より多い確率40%、日照時間は平年より少ない確率40%と予想されている。

[防除上の注意]

- 1) イネの抵抗性が低下する幼穂形成期から穂ばらみ期にかけて上位葉鞘に進展するので、防除は穂ばらみ期に行い、その後も上位葉鞘への進展が続く場合は2回目の防除を実施する。
- 2) 生育に伴い株間がうっぺいしてくると、急激に病勢が進展するので、昨年多発したほ場では十分注意する。

3 ツマグロヨコバイ（やや少）

- 1) 7月中旬の発生面積率19.0%（平年34.9%）は平年より少、20回すくい取り虫数0.8頭（平年1.3頭）は平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 萎縮病、黄萎病を媒介するので注意する。

4 セジロウンカ（やや多）

[予報の根拠]

- 1) 7月中旬の発生面積率100.0%（平年72.2%）は平年より多、20回すくい取り虫数28.1頭（平年27.0頭）は平年よりやや多である。
- 2) 6月下旬～7月上旬まで梅雨前線の活発な活動による下層ジェット気流の発生で断続的な飛来が認められている。特に、7月1半旬には県内すべての予察灯調査点（4カ所 都城市、延岡市、国富町及び佐土原町）で多飛来が観察された。

[防除上の注意]

- 1) 幼穂形成期頃に多発生すると吸汁による生育抑制、下位茎葉の黄変枯死、出穂の遅れが生じるので、発生状況を見て若齢幼虫期に防除する。

5 トビイロウンカ（やや多）

[予報の根拠]

- 1) 7月中旬の発生面積率11.9%（平年2.9%）は平年より多、株あたり虫数0.01頭（平年0.00頭）は平年よりやや多である。
- 2) 都城市では6月5半旬と7月1～2半旬に、延岡市では6月5半旬と7月1半旬に、国富町では7月1半旬に、それぞれ飛来が確認されている。

[防除上の注意]

- 1) 少ない飛来量でも増殖率が高く、坪枯れ等大きな被害が生じるため、長期残効型

の箱施薬を行っている場合でも、ほ場での増殖に注意し、7月下旬～8月上旬頃の短翅型雌の防除を徹底する。（要防除密度は短翅型雌成虫が株当たり0.2頭）

6 コブノメイガ （並）

[予報の根拠]

- 1) 7月上旬の発生面積率14.3%（平年34.1%）、被害株率1.8%（平年7.3%）はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 防除適期は、粒剤を使用する場合は発蛾最盛期で、粉剤及び水和剤等を使用する場合は幼虫ふ化期（発蛾最盛期の7日後）である。
- 2) 県内3か所（都城市・えびの市・佐土原町）のライトトラップで、7月9～11日に飛来のピークが観察された。

野菜類全般

1 アブラムシ類 （並）

[予報の根拠]

- 1) 黄色水盤トラップ（佐土原）による誘殺数は平年並に推移している

[防除上の注意]

- 1) 作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

2 ハスモンヨトウ等のチョウ目（鱗翅目）害虫 （やや多）

[予報の根拠]

- 1) ハスモンヨトウのフェロモントラップでの誘殺数は、西都市、佐土原で平年よりやや多い傾向である。
- 2) タバコガのフェロモントラップ（西都市）での誘殺数は平年よりやや多い。
- 3) オオタバコガのフェロモントラップ（西都市）での誘殺数は平年よりやや多い。

[防除上の注意]

- 1) 早期発見に努め、若齢幼虫期の防除を徹底する。

カンキツ

1 かいよう病 （多）

平成19年度病害虫発生予察注意報第3号（平成19年7月24日発表）参照

[予報の根拠]

- 1) 7月中旬の果実調査では、発生面積率50.0%（平年7.4%）、発病果率2.8%（平年0.5%）はいずれも平年より多である。
- 2) 7月中旬の春葉調査では、発生面積率55.0%（平年23.6%）、発病葉率3.4%（平年2.0%）はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 発病した枝葉は伝染源となるので可能な限り取り除き園外に持ち出して焼却する。
- 2) 風雨による枝葉の損傷を少なくするため防風垣を整備する。特に台風の襲来が予想される時は事前に薬剤散布を行う。
- 3) ミカンハモグリガの被害も重要な病菌侵入口となるので、夏秋梢の発生の多いほ場では防除を徹底する。

2 黒点病 （やや少）

[予報の根拠]

- 1) 7月中旬の果実調査では、1ほ場で微発生が確認された。
（平年 発生面積率18.8%、発病果率 3.4%）

[防除上の注意]

- 1) 伝染源となる枯れ枝は、可能な限り取り除き園外に持ち出して焼却処分する。

2) 雨が多いと多発する恐れがあるので、積算降水量300mm毎又は1か月おきに薬剤散布を行う。

3 ミカンハダニ (並)

[予報の根拠]

1) 7月中旬の発生面積率40.0%(平成38.7%)、寄生葉率5.8%(平成5.0%)はいずれも平成並である。

[防除上の注意]

1) 生息密度が高くなると防除が困難になるので、寄生葉率30%(1葉当たり虫数0.5~1頭)を目安に防除を行う。

4 チャノキイロアザミウマ (やや多)

[予報の根拠]

1) 7月中旬の発生面積率20.0%(平成3.4%)は平成より多、寄生果率0.5%(0.3%)は平成よりやや多である。

[防除上の注意]

1) 密度が高くなると防除が困難になるので、1果当たり虫数0.3頭を目安に防除を行う。

チャ

1 炭疽病 (やや多)

[予報の根拠]

1) 7月中旬の発生面積率70.6%(平成52.1%)は平成よりやや多、 m^2 当り病葉数4.1(平成4.7)は平成並である。

2) 向こう1ヶ月の気象は、降水量は平成より多い(40%)、日照時間は少ない(40%)と予想されている。

[防除上の注意]

1) 新芽の生育期に雨が多いと発生しやすい。開葉期に防除を行い、多発生が予想されるときには追加防除する。

2 輪斑病 (やや多)

[予報の根拠]

1) 7月中旬の発生面積率23.5%(平成9.0%)、 m^2 当り病葉数0.4(平成0.6)はいずれも平成よりやや多である。

2) 向こう1ヶ月の気象は、降水量は平成より多い確率40%、日照時間は平成より少ない確率40%と予想されている。

[防除上の注意]

1) 秋芽の生育期に雨が多いと感染しやすい。特に中山間地域では発生が多いので秋芽の生育期に薬剤散布をする。また、摘採・整枝直後の傷口から感染するので、作業後なるべく早く防除を行う。

2) 多発園では新梢枯死症の発生が懸念されるので、秋芽開葉期にも防除を行う。

3 チャノココクモンハマキ (並)

[予報の根拠]

1) 7月中旬の発生面積率5.9%(平成4.2%)は平成よりやや多、 m^2 当り虫数0.1頭(平成0.1頭)は平成並みである。

[防除上の注意]

1) フェロモントラップ調査(3箇所)での発蛾最盛期は6月第2~5半旬で、次の発蛾最盛期は7月下旬~8月上旬と予想される。

2) 発蛾最盛期の7~10日後が防除適期である。

4 チャハマキ (並)

[予報の根拠]

- 1) 7月中旬の発生面積率5.9%(平年7.7%)、 m^2 あたり虫数0.1頭(平年0.2頭)はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- 1) フェロモントラップ調査では、都城市、三股町での発蛾最盛期は6月第5,6半旬、田野町での発蛾最盛期は6月第2半旬であった。次の発蛾最盛期は都城市、三股町では8月中旬、田野町では7月下旬頃と予想される。
- 2) 発蛾最盛期の7~10日後が防除適期である。

5 チャノホソガ (並)

[予報の根拠]

- 1) 7月中旬の発生面積23.5%(平年29.4%)、 m^2 あたり虫数0.6頭(平年0.6頭)はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- 1) フェロモントラップ調査(3カ所)での、次の発蛾最盛期は7月第6半旬頃と予想される。
- 2) 発蛾最盛期の7~10日後が防除適期である。

6 カンザウハダニ (並)

[予報の根拠]

- 1) 7月中旬の発生面積率23.5%(平年16.6%)は平年よりやや多、寄生葉率1.2%(平年1.5%)は平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 同一薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤の口-テ-ション散布を実施する。

7 チャノキイロアザミウマ (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 7月中旬の見取り調査による発生面積率82.4%(平年67.0%)は平年よりやや多、寄生葉率7.2%(平年8.2%)は平年並である。

[防除上の注意]

- 1) この時期は卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、とくに蛹は地表面にいて防除効果が低いので残効性の長い薬剤が1週間間隔での連続散布を行う。

8 チャノミドリヒメヨコバイ (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 7月中旬の見取り調査による発生面積率70.6%(平年40.4%)、寄生葉率9.5%(平年4.4%)はいずれも平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- 1) チャノキイロアザミウマとの同時防除とする。

9 クワシロカイガラムシ (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 7月中旬の巡回調査では発生面積率35.3%(平年16.0%)、寄生株率4.7%(平年3.1%)はいずれも平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- 1) 最近、増加傾向にあるので早期発見に努める。(周縁部から発生しやすい。)
- 2) 防除適期は幼虫ふ化開始から1週間後、または幼虫ふ化最盛期なので、ふ化状況をよく観察して防除する。
- 3) 薬剤散布は、成木園で10a当たり1,000リットル程度を目安に、噴口を茶株の中に差し込むなどして枝幹に十分かかるようにていねいに散布する。

その他

- 1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。

日本植物防疫協会ホームページ <http://jppn.ne.jp>

農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/nouyaku/>

- 2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。
特に水質汚濁性農薬ベンゾエピン剤（商品名、マリックス乳剤、粒剤等）は使用しないこと。

- 3 発生量（程度）の区分

多い	（高い）	やや多いの外側10%の度数の入る幅
やや多い	（やや高い）	平年並の外側20%の度数の入る幅
平年並		平年値を中心として40%の度数の入る幅
やや少ない	（やや低い）	平年並の外側20%の度数の入る幅
少ない	（低い）	やや少ないの外側10%の度数の入る幅 （平年値は過去10年間の平均）

- 4 予察情報の種類

病害虫防除・肥料検査センターから発表する情報は次の5つです。

- 1) 予報・・・向こう1か月の発生状況を予測し、毎月25日前後に発表する。
- 2) 注意報・・・主要な病害虫の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
- 3) 警報・・・主要な病害虫の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。
- 4) 特殊報・・・県内で初めて発生を認めた病害虫がある時や、病害虫の発生様相が特異な時に発表する。
- 5) 防除情報・・・注意をうながす必要がある病害虫の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。

お知らせ (<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/>)

病害虫防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。予察情報の根拠となる地域別調査データ、海外飛来性害虫の飛来状況及び防除対策等を掲載しています。ぜひご利用ください。

【文書取扱】

病害虫防除・肥料検査センター 櫛間

TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-7499

E-mail: byogaichu-hiryo

@pref.miyazaki.lg.jp